

河内長野市史

第四卷 史料編一

大阪府の河内長野市は、観心寺や金剛寺をはじめとして、ゆたかな史跡と古文書や文化遺産に恵まれていることで、歴史研究者にはつとになじみ深い地方であるが、昭和三十九年以来、市制一〇周年記念事業として市史の編修が進められ、昭和四七年その第一冊目として「史料編一」が刊行された。発刊の辞によれば、全部で一〇巻をこえる計画で、執筆には時野谷勝氏をはじめ二二名の各専門分野の諸氏があたられている。本巻はその第四巻で、井上薫（古貞）・永島福太郎（中世）両氏の担当部分である。本巻の構成は、つぎのようになっている。

古代

- 一、古代の河内長野地方
- 二、観心寺文書
- 三、金剛寺史料
- イ、金剛寺文書
- ロ、経疏類奥書

中世

- 一、観心寺文書

右の古代の一は、つづく二（二二五）・三（六九点）以外の、記紀以下の関係古代史料二九点を編集したものである。しかし本書の大部分は、文治五年から文禄五年にいたる六六三点におよぶ中世の観心寺文書である（なお古代二にも中世文書が若干含まれている）。「あとがき」によれば当初本巻に古代・中世の關係史料が網羅される予定であったが、中世文書が多数のため、中世の金剛寺文書などは次巻へ移されることになったようである。

改めていうまでもなく、観心寺文書や金剛寺文書は、すでに『大日本古文書』の一部として公刊されているが、本市史の史料編では、それらを原本について再調査して新たに多数を補っているのが注目される。利用の便を考えて原則として年代順に配列した点にも新しさがある。新紹介の史料としては、古代三の経疏類奥書四五点が『平安遺文』題跋編にも未収のものであり（ただし『平安遺文』題跋編一五四四号・二三二〇号など『金剛寺古記』所載のものが本書には収められていない）、さらに中世の観心寺文書にも『大日本古文書』に不載のものが散見する。用字が当用漢字に改められてはいるが、この点で中世史研究に寄与するところが大きいといわねばならぬ。な

お本書では、『大日本古文書』所載のものにはその文書番号を附し、それによって新紹介の文書も一目瞭然ならしめている。

本書の構成をみると、史料の配列の原則に苦心されたあとがうかがえるが、形式的な観点からいえば、前掲の一、二、三の項目名をみてもやや体裁不統一の感がないではない。史料の見出しの仕方や目次の掲げ方もそうである。おそらく年代順を原則としながらもなお類別・所蔵者別や遺存形態を示すことにも配慮されたため、不統一が生じたであろう。ただしそれは、史料集を編纂するとき誰しも苦慮する困難であり、本書の価値を損ねるものではない。

次巻に予定される金剛寺文書は、同寺の古文書や経巻類の調査・整理がいままで全く不十分であった実情から、筆者の知る限りでもかなりの新紹介史料が期待される。住民が自分たちの住む地域を認識する一つの方法として市史に期待するものは、おそらく本編の通史的叙述によって果たされるであろうが、それとは別に本市史だけがもちうるこの大きな学問的な役割への期待をのべて、簡単な紹介をおえたい。

（A5判）口絵アート一〇頁 本文五七五頁
昭和四七年三月 河内長野市役所
（黒田俊雄・大阪大学助教授）